

令和7年度和歌山県文化賞

おかだ まさし
岡田 全司

住 所 大阪府堺市
出 身 地 和歌山県有田郡湯浅町
生 年 昭和24年

◎ 業績及び経歴

昭和24年有田郡湯浅町に生まれる。昭和48年和歌山県立医科大学を首席で卒業後、大阪大学大学院医学研究科（第三内科学）博士課程に進み、山村雄一氏、岸本忠三氏の指導の下、癌や結核に重要なT細胞免疫の分化因子の研究で昭和52年博士号（医学）を取得。その後、国立白浜温泉病院（現在の国立病院機構南和歌山医療センター）で内科医として勤務。昭和53年から米国ワシントン大学フレッド・ハッチンソン癌研究所に留学し、癌細胞・結核菌・ウイルス感染細胞を死滅させる重要なキラーT細胞を活性化させるキラーT細胞分化因子を世界に先駆けて発見する。帰国後の昭和56年、氏は世界で最初にヒトT細胞ハイブリドーマを作製し、種々のリンパ球活性化因子を産生する、画期的なヒトT細胞クローン確立法（CEM ヒトT白血病細胞と正常ヒトT細胞を融合）を樹立し、世界の免疫学進展に大きく貢献する。その後も、インターロイキン6の発見につながるB細胞分化因子の発見など、次々に重要な発見を行う。また、結核ワクチン開発の功績も顕著である。平成17年に国立病院機構近畿中央呼吸器センター臨床研究センター長に就任し、平成18年から大阪大学大学院医学研究科招聘教授を併任していたが、その当時に手がけた結核治療ワクチン（HSP65DNA+1L-12DNA）は、多剤耐性結核患者に臨床応用され、結核菌が0個となる画期的な治療効果を発揮した。氏の一連の研究は、世界で50万人以上の患者がいと推定される多数の難治性結核に対しても多大な効果を発揮し、結核治療DNAワクチンの臨床応用にも成功している。これらの実績により、世界保健機関（WHO）の新結核薬委員を務めるなど、国際的にも高く評価される。また、複数府県にまたがる広域共同研究グループの研究代表者や世話人を多数務め、本県に多い多剤耐性結核の調査や新治療法研究、呼吸器疾患研究等について国立病院機構和歌山病院を長年指導するなど、本県の医療にも貢献している。

氏は、我が国を代表する結核ワクチン及び免疫研究者であり、その業績は世界的で本県の誇りである。

■ 現 在

・独立行政法人国立病院機構近畿中央呼吸器センター臨床研究センター客員研究員

◆ 主な表彰歴等

平成13年 厚生労働省近畿厚生局長賞
平成17年 一般財団法人イスクラワクチン・医療基金 第29回多ヶ谷勇記念ワクチン研究イスクラ奨励賞
平成20年 日本遺伝子治療学会（現・日本遺伝子細胞治療学会）第14回日本遺伝子治療学会誌賞
平成24年 日本結核病学会（現・日本結核・非結核性抗酸菌症学会）今村賞